

看護師経験のある助産師学生の助産学実習における 困難と教育的配慮

Difficulties in Training Midwifery Students with Clinical Nursing Experience and their Educational Support

須 貝 麻由美

Mayumi SUGAI

小 林 由希子

Yukiko KOBAYASHI

要旨

目的

本研究は、看護師としての臨床経験がある助産師学生の助産学実習場面での学習困難について、その状況を明らかにし、臨床看護経験が助産学実習にどのように活用できるのか、そのために必要な教育的配慮について検討することを目的とする。

対象と方法

看護師としての臨床経験を経てT大学大学院助産研究科に入学した学生3名を対象に、1年次に経験した助産学実習について、インタビューガイドを用いた半構造的面接を行った。そこで得られた主観的な経験の語りの内容、教員や臨床指導者による教育的示唆、具体的な実習状況を併せてデータとし、質的分析を行った。

結果

臨床看護経験を持つ助産師学生は、目的意識が明確であり、学業への意欲も非常に高かった。しかし、助産学実習においては達成感や充実感よりも自尊心や自己効力感の低下を感じる場面が多くあった。看護師経験が活用できた内容は、「コミュニケーション力」、「一般的な看護技術」、「臨床スタッフの状況を判断して行動する」等であった。これに対し、経験が活用できなかった内容は、「健康な方へのウェルネス志向の助産過程を考えることが難しかった」、「実習で求められる到達度が現役学生より高いと感じた」、「経験を活かさないことへの苛立ち」等であった。また、現役学生に比較して学習に時間を要する、体力の低下、経験が活用できないことへの心理的ストレスがあり、臨床看護経験をもつことが学習困難に影響している可能性が考えられた。

結論

助産学実習において、臨床看護経験を持つ学生が、その経験を効果的に活用できないことによる学習困難の現状があった。その背景には、助産過程において問題志向型からウェルネス志向型への発想転換をする際、これまでの経験との間で思考の混乱が起り、経験が活用できないことによる自己効力感の低下があった。そのため、これまでの個人の経験を考察し、客観的思考をサポートする学習を取り入れた教育的配慮が必要である。

Purposes

Midwifery students with clinical nursing experience frequently have difficulties in midwifery practicum although they aspire to pursue the study with clear purposes. Considering this situation, this study attempts to determine problems involved, understand how clinical nursing experience is utilized in midwifery training, and consider educational measures necessary in the training.

Participants and methods

We conducted semi-structured interviews, based on an interview guide, with three students enrolled in a midwifery course of T College. The students were asked about the midwifery practicum they had experienced in the first year. Data from the interviews were classified into details of the subjective experience, educational advice given by faculty and clinical instructors, and details of the training, and these were qualitatively analyzed.

Results practicum

Midwifery students with clinical nursing experience had clear purposes and motivation to pursue the study. However, there were many situations where self-esteem and self-efficacy were lower than any sense of achievement or satisfaction in the midwifery training. We found that students felt their clinical nursing experience useful include “communication skills”, “general nursing skills”, and “attitude towards the work by evaluating the situation of clinical staff”.

On the other hand, we also found that the students did not feel the clinical nursing experience useful include “difficulty in thinking about wellness-oriented midwifery process for healthy pregnant women”, “feeling that the goals required in the training were more demanding than for midwifery students who have no nursing experience”, and “irritation at the inability to make use of their experience”. It may be inferred that the clinical experience caused difficulties in the learning because they need more time to study than the midwifery students without nursing experience, are physically less able to keep up, and suffer from mental stress due to the inability to make use of their experience.

Conclusions

It became clear that students with clinical nursing experience have difficulties in the midwifery practicum because it was not possible to incorporate it effectively into their clinical experience. This may be ascribed to feelings of poor self-efficacy due to the inability to make use of the clinical experience as they experience conflicts between their prior experience and ideas, this occurs while trying to change a problem-oriented approach into the wellness-oriented midwifery process. The results suggest that it is necessary to consider educational measures that introduce reflective learning by examining the previous clinical nursing experience of the students.

キーワード：助産師学生 (Midwifery students)

臨床看護経験 (clinical nursing experience)

助産学実習 (midwifery practicum)

助産学実習における困難 (difficulty in the midwifery practicum)

助産師教育 (midwifery education)

I. 諸言

助産師を志す学生の中には、看護師養成機関を卒業した年に看護師としての臨床経験をもたず入学してくる学生のほかに、数年から十数年の看護師としての臨床経験を積んでから助産師養成機関に入学してくる者も多くいる。看護師としての臨床経験をしてきた学生は年長者であり、臨床経験があることに一目置かれる。しかし、そのような学生はそれゆえに世代間相違の感覚を抱きやすく、年上という意識や対等になれない感覚を互いに持ちやすいといわれる。¹⁾ また、看護教育において、2010年の厚生労働省による報告（看護師教育ワーキンググループ経過報告）²⁾では、「社会人学生がいることで学習状況や生活体験などの様々な面で学生間の差が広がっており、一斉教授をする際に学生のレディネスに合わせるのが難しくなっている」と述べられている。

平成21年に保健師助産師看護師法が一部改正され、助産師教育の充実が求められ、教育年限を1年以上に延長、修業単位数も28単位に増加された。³⁾ 現在、助産師の教育機関は多様化しており、かつては1年課程の専修学校や短期大学専攻科が多かったが、現在では大学や大学専攻科、2年課程の大学院修士課程での養成が増加してきている。入学者の中で、看護師としての臨床経験がある者が毎年3割～5割程度を占めている大学もあり、本大学大学院においてもその人数は毎年全体の2割～4割程度を占めている。そのような入学者は、看護大学もしくは短大・専修学校を卒業後、3年以上の実務経験を経て入学してくる。

看護師の臨床経験をもつ入学者の助産師資格取得への志望動機は様々である。鈴木¹⁾は、「助産師に憧れて夢を追って」、「同僚の助産師をみて」、「キャリアアップを目指して」、などが挙げられている。臨床経験を持つ助産師学生の背景経験も様々であるが、志望動機が明確であるため学習の意欲は高い。

しかし、一定の看護の臨床経験を有するにも関わらず、臨床経験のある学生が助産師教育の中では学習困難を抱える者が多く見られ、看護の経験が助産学の学習のレディネスとして活用されていないように感じられる。看護師経験のある助産師学生にとっては、経験のない現役学生と同様のプログラムで同様に扱われることは、今までの看護経験が助産学実習の場面で活用できないジレンマや自尊心の低下を招く可能性もある。

一方で、筆者自身の経験から、臨床経験があることによって実習場面において現役学生よりも高い到達度を要求されることもあり、そのような状況では、看護師である自分と学生としての自分の取るべき態度についての戸惑いがあった。鈴木⁴⁾は、そのような看護の臨床経験をもつ学生について、「ぎこちない実習態度」、「ぬぐえない先入観」という状況があることを挙げている。

臨床経験を持つ学生の経験が活用されていると感じる内容として、対象者とコミュニケーションをとる力、担当する患者から看護師という安心感を持たれること、基本的な看護技術が容易に実施できること、などが挙げられる。しかし、助産学実習の場面において、すでに獲得されている学習や技術が認められない場合や、「学生らしく」振舞おうとして自らその経験を押し隠すような場合は、それまでの看護経験が助産学実践に活かされないことになる。また、今までの経験を考慮されないことに対するネガティブな感情や、経験が役に立たないという無力感を抱くことにつながる。これゆえ、特に助産学実習場面において、看護師経験者に対しては、対象者とのコミュニケーションスキルや基本的看護技術などの臨床経験を十分に活用できる教育的配慮が望ましいと考える。

これまでの助産学分野の研究において、鈴木¹⁾は、臨床経験のある助産師学生について、学生生活に臨床経験が及ぼす影響や実習場面における影響について報告している。しかし、看護師としての臨床経験が助産学実習に与える影響に焦点を当

てた詳細な聞き取り、教育的配慮についての検討はまだなされていない。そのため、T大学大学院助産研究科において看護の臨床経験を持つ助産師学生を対象に、半構成的面接の手法を用いた助産学実習についてのレビューとそのリフレクションを行った。レビューにおいては主観的な語りを尊重し、得られたその言葉内容の記述を具体的な実習状況と併せてデータとし、質的に分析を試みた。その結果より、臨床経験を持つ助産師学生への教育的配慮の必要性について検討した。

II. 研究目的

本研究は、看護師としての臨床経験がある助産師学生の助産学実習場面での学習困難について、その状況を明らかにし、臨床看護経験が助産学実習にどのように活用できるのか、そのために必要な教育的配慮について検討することを目的とする。

[本論文におけるキーワード]

助産師学生、臨床看護経験、助産学実習、助産学実習の困難、助産師教育

KeyWords: Midwifery students, clinical nursing experience, midwifery practicum, difficulty in the midwifery practicum, midwifery education

[用語の操作的定義]

1. 臨床経験のある助産師学生: 看護教育機関を卒業後、看護師として臨床での勤務経験を有し助産師教育機関に入学した者、とする。
2. 助産学実習: 助産教育課程で行われる実習中、今回は病院産科病棟における実習とする。
3. 現役学生: 看護大学を卒業後、臨床経験を経ず助産師課程に入学した者とする。

III. 研究方法

1. 研究対象者

看護師として3年以上の臨床経験後、T大学大学院助産研究科に入学した2年次の学生3名で1年次に助産学実習(病院実習)を終了した者。

2. データ収集方法と期間

対象者とは個別に面接を行い、インタビューガイドを用いた半構造的面接を実施した。面接とその内容については事前説明を行ない、面接は1回から対象者の状況により数回行った。1回の面接時間は1時間程度であった。面接場所はプライバシーが守られる環境として個室を使用し行った。期間は平成28年5月12日～5月23日である。

3. 面接内容

インタビューガイドの内容は、以下の通りである(資料1参照)。

- 1) 年齢、看護師としての臨床経験年数、及びその際の診療科
- 2) 助産師を志した動機とその時期、専門職大学院を選択した理由
- 3) 大学院での助産学実習の内容についての振り返り: 実習期間、実習中の生活状況、楽しかったこと・つらかったこと、ストレスの有無と内容、教員や実習メンバーとの関係
- 4) 看護師経験が助産学実習に影響を与えた内容: 経験の活用の有無と状況、具体的な場面における状況
- 5) 助産学実習での教育的配慮について: 現役学生との指導内容の違いの有無、もっと指導してほしかったこと
- 6) 看護経験を経てからの入学で、学習上実習経験を通して感じていること(満足できた内容や不足部分を含む)

4. 分析方法

面接によって得られた対象者の語りは、承諾を得て細かくメモを取り、逐語録を作成後、その言葉をテキスト化し短文ごとの言語をデータ化し分類を試みた。分析は主観的な語りを状況と併せ質的に検討を試みた。⁵⁾

5. 倫理的配慮

研究対象者には面接前に研究依頼書を提示し、研究目的、プライバシー保護、協力の任意性、調査開始後も途中で辞退が可能であること、個人に不利益を被らないことを口頭および文書にて説明した。また、得られた情報は研究者以外に取り扱うことがなく厳重に保管し、研究終了後に研究者の責任において処分することを説明し、同意書を得た。なお、本研究は平成28年5月天使大学倫理委員会の承認（第2016-44号）を得て実施した。

IV. 結果

1. 対象者の背景（表1）

対象者は看護師としての臨床経験後、T大学大学院に進学した助産師学生3名。年齢は26～28

歳、臨床経験年数は4～6年。産科での勤務経験者はいなかった。助産学実習では、前期9週間、後期12週間の病院実習を通して、妊娠期17例以上、分娩介助については全員10例以上を経験し、その分娩介助事例の産褥期・新生児期の助産ケアも経験していた。

2. 専門職大学院を志望した動機

対象者らは、看護師養成機関の母性看護学実習で、分娩の見学と産褥期の母子の受け持ち看護実習を経験し、出産を通して命の誕生に感動を受けたことが助産師を志す契機となっていた。看護師としての臨床経験から、それぞれ、「臨床では死ばかりを経験してきたので今後は生の喜びのある仕事をしたいと思った」、「二つの命を預かるので深く学びたいと思った」、「卒業生の先輩がT大学大学院は助産の勉強が深まると教えてくれた」、「学びたいことが一年課程では学びきれないと思ったのでT大学大学院を選択した」という志望動機を語った。また、「臨床でエビデンスのないケアをしている看護師も多いので自分はきちんと学びたいと思った」と、助産学を学ぶことへの意欲を語った。

表1 対象者の背景

	年齢	臨床経験年数	経験した診療科	勤務体制	職位指導経験	最終学歴	母性実習での経験
学生A	28歳	6年	呼吸器内科と消化器内科病棟	3交代	スタッフ プリセプター 学生指導	看護短期大学	妊娠期：なし 分娩見学：1回 母子の看護過程展開：1組 沐浴見学：1回/実施：なし
学生B	27歳	4年	小児科病棟	3交代	スタッフ プリセプター	看護専門学校	妊娠期：なし 分娩見学：1回 母子の看護過程展開：1組 (帝王切開) 沐浴見学：1回/実施：なし
学生C	26歳	4年	救命センター 内視鏡センター (外来)	3交代 日勤	スタッフ	看護専門学校	妊娠期：レオポルド、腹囲測定実施 母親学級：1回見学 分娩見学：1回 母子の看護過程展開：1組 沐浴見学：1回/実施：なし

3. 助産学実習における看護経験の活用：経験が活用できた内容（表2）

1) 看護についての学び直し

看護の臨床経験をもつ助産師学生は、「助産学実習の中で看護の学び直しができた」と述べた。例えば、「自分でできていると思ったことも客観的にみたらそうではないことを教えられた」など、今までの看護技術の不確かだった部分を確認できる機会となったことを語った。また、今まで看護の対象者は疾病を抱えている方であったが、助産では健康な妊産婦が対象者である。その違いによる戸惑いは感じながらも、看護師としての経験で培ってきたコミュニケーション力が、「実習を経てまた変わった」という言葉にあるように、必要な情報を引きだし整理することに有用なものとして発揮され、実習の振り返りの中で気づきが多く、助産学実習を通してさらにその技術を磨くことができたと感じていた。

2) 過去の臨床看護経験の活用

過去の臨床での看護経験によって培われた内容として、「コミュニケーションがスムーズにできた」や、「笑顔で対象者に近づく能力」など、＜対象者への寄り添う気持ち＞について、「記録の書き方や看護のアセスメントができる」、「基本的な看護技術ができる」など、＜助産と共通する基本的看護技術＞について挙げられた。また、「スタッフの動きを見て声をかけ報告できる」など、＜臨床の場の行動や空気を読む＞ことで、自主的に指導者との調整のタイミングを掴れたと語った。対象者らは、対人コミュニケーションスキルについては過去の臨床経験で身につけていたため、実習の場におけるケアの対象者だけでなく、実習先のスタッフとのかかわり方に対しても、「経験の活用が十分にできた」と答えていた。また、バイタルサインの測定や清拭など基本的な看護技術については、「独立して行わせてもらえる場面が多かった」と話した。これについては、「現役学生とは異なる扱いをうけている」という自覚があり、＜看護師として

の経験が尊重された関わり＞によって「自信がもてた」と、自己効力感を高めることにつながっていた。また、対象者からも看護師経験を有することで、信頼感を与えられた面も多く、現役学生に比較してスムーズに実習が進んだ場面も多くあった。

また、自分の経験を他の実習メンバーに認められ頼られることも多く、「頼りにされていた」、「相談を受けた」ことに嬉しさを感じ自尊心を高めることにつながっていた。

臨床経験者であるため、日常業務の中で行ってきた記録やアセスメントの仕方や活用については基本が身につけており、現役学生よりさらに視野を広げて考えることが出来ていた。また、相手の立場になって考えることについては「自然にできていた」と答えており、＜共感性の高さ＞がうかがわれた。また、「勤務していた場とは異なっても、臨床での動き方のイメージがあり、場の空気を読んで行動できた」ことで、スタッフや指導者などから良いタイミングで指導・助言を受けることができていた。

3) 人間関係における新しい発見：ケアの対象者や現役学生メンバーからの学び

実習では、異年齢の学生とメンバーを組み、共に行動することも多くなる。年齢も人生経験も異なる年下の現役学生との人間関係であったが、実際には、遠隔地での実習先で共に生活していく中で、「時には年上として頼られ、時には新しい学びをする同じ立場の学生として平等な関係として、それぞれをバランスよく保つことができていた」と語った。そして、「休日にはメンバーと一緒に出かけて、食事に行き、ストレスを発散できた」という語りもあった。一方、「他の（現役学生）メンバーが対象者とスムーズにコミュニケーションが取れない場面を見てもどかしく思うこともあった」など、経験から感じる場面もあった。

また、助産学実習を通して、「妊産婦さんにありがとう、と感謝されたことで疲れがとんだ」、「産

表2 助産学における看護経験の活用：経験が活用できた内容

カテゴリー	サブカテゴリー	データ：対象者の言葉
1) 看護についての学び直し	・看護師経験の中で学べていなかった内容への気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・前期実習でスルーしていたことを後期実習にしっかりと学び直せたので教員が変わったこと、施設が変わったことがよかった (C-49) ・自分ではできていると思っていたことも、客観的にはそうではないことを教えてくれた (A-39) ・助産師として臨床に出たときに自分が困らないように、実習を通して深く学びたいと思うようになった (A-59) ・コミュニケーション能力やそこから導き出した必要な情報の引き出し方などは実習を経てまた、変わったと感じる (A-51) ・机上では学べなかった新しい知識の発見があった (C-39)
2) 看護経験の臨床実習場面での活用	<ul style="list-style-type: none"> ・経験で培ったコミュニケーションスキル ・必要情報を引き出せる ・対象者に添うことがすぐにできる ・助産と共通する基本的看護技術の使用 ・臨床の場の空気を読む (指導者との調整のタイミング) ・対象者から無条件に信頼される (すでに訓練された共感性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションがスムーズにできた (3名) (A-22) (B-27) (C-30) ・一般的な看護知識や技術、コミュニケーション、病院の雰囲気や空気を読んで行動できたことは働いていたからだと思う (A-22) ・コミュニケーションがスムーズに運べることで、対象者の家での生活や仕事のことなどイメージしやすかった (C-30) ・記録の書き方 (A-24) ・アセスメントの仕方や方向性 (A-25) ・一度臨床に出ているからこそ人を大切に思う気持ちを養うことがさらにできるようになった (A-57) ・笑顔で患者に近づく能力 (A-26) ・妊産褥婦とのかかわりかた (B-26) ・上の子を連れてきている場合、その子の相手をうまくできた (B-28) ・沐浴を仕事で行っていたのでスムーズにできる (B-25) ・勤務時代に赤ちゃんをよく見ていたので新生児のことは強かった (B-29) ・スタッフの動きを見て声をかけたり報告できる (C-52) ・なにかをするとき、今じゃなくてもよい、今でなくてはならないの判断ができていた (A-34) ・病院内での動き方がわかるのは実際に臨床で働いていたからだと思う (B-60) ・使用している物品が慣れ親しんだものなので、実習に入りやすかった (B-63) ・知っている施設で実習できたのは、知り合いが多いことでの安心感もあるし、地域性、土地勘もあるのでよかった (B-62) ・オンコール実習の後などは自分のペースで過ごせた (夜勤で鍛えられていたので寝たい時に寝るなどがうまくできた) (A-23) ・同意書をもらう時に「看護師として働いていた人です」と説明されていて受け持ちを許可してもらいスムーズに実習がすすんだこと (2名) (A-27) (C-33)

<p>3) 人間関係における新しい発見 (対象者・現役学生からの学び)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・経験を尊重された現役学生との関わり ・リーダーシップの学び ・共に新しい学びをする異年齢の中での育ち合い ・現役学生の行動についての気づき ・対象者からの励ましや感謝が与える影響 	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーから頼られているという感じがしてうれしかった (A-21) ・頼られているまではいかないけど、相談を受けるとうれしくなる (C-54) ・実習メンバーでも話が詰まった時には、自分に話が振られて来るので自分の経験を参考や活用してくれている気分になる (C-53) ・経験を尊重してもらっている感じはあったし、お姉さんのような感じであったかな (A-19) ・自分をうまく利用して、自分にケアのことなどの相談をしてくれた (A-20) ・実習メンバーが自分を臨床経験者として見てくれているのを感じていて気が引き締まる (B-33) ・毎日みんなで集まって、困ったことや今日あったことを話して解決していった (2名) (B-22) (C-28) ・記録が大変な時も教えあって乗り越えた (B-23) ・自分が年上だという感覚がなくメンバーに溶け込めた (C-29) ・プライベートで休日に実習メンバーと出かけおいしいものを食べたりすることでストレス発散した (3名) (A-8) (B-10) (C-13) ・他の学生がジタバタしていると自分は経験者だからしっかりしないと、という気持ちがあった (B-24) ・メンバーを見ていてどうしてコミュニケーションがスムーズにできないかともどかしく思っていた (C-31) ・実習で産婦さんとの会話やケアをしているときの充実感 (A-6) ・妊産婦さんにありがとうと感謝されたことで疲れが飛んだ (B-7) ・実習で自分が関わった対象者が次の健診や産後に会ったときに喜んでくれた (C-11) ・自分が指導したことで対象者が有益に働いて、結果よかったと言ってもらえた (C-12)
<p>4) 看護の臨床経験を考慮した個別的な指導・助言の存在</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの看護経験を尊重されたことで深まった学び ・自尊心が高められ自己効力感が増す 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほかの学生は教員等がついて行っていることも、バイタルサインの測定や清拭、更衣などは自主的に教員や指導者がいなくても行わせてくれた (B-34) ・分娩第1期も自主的に行わせてもらっていた (B-35) ・教育分野卒の人が指導者でいて、今までのやり方が変わるような助言をもらって (分娩介助手技など) その次の分娩介助で初めて感動できるくらいの介助ができた。その方から退院後も学生さんに会いにきたと言われたりして、いい介助をすると相手にもいい体験としてとらえてもらえるということがわかったこと (C-57) ・具体的にどんな言い方をしたらよいかとか表現方法とか (C-40) ・看護師は～～してくださいとかの表現が多かったけど、妊婦主体で強制にならないような言い方とか教えてくれた (C-41) ・看護もこういう考えでしょ？と分かりにくいところを言い換えて教えてくれたりした (C-42) ・実習内容自体はほかの学生と同様の扱いをしてもらってよかった (2名) (A-32) (C-34) ・わからないことがあれば、まず自分で調べる癖がついている。実習中もすぐに聞くよりも自分で調べてみてどうしてもわからなかったことを聞いた (A-61) ・机上では学べなかった新たな知識を指導者さんは優しく教えてくれた (B-21)

婦さんとの会話やケアをしているときの充実感」など、〈対象者からの励ましや感謝が与える影響〉は、看護師経験者ならではの思いとして語っていた。経験者では、実際の対象者との会話やケアを行える充実感によって、今までの臨床でのケアと同様の喜びを感じていた。

4) 看護の臨床経験を考慮した個別的な指導・助言と助産学実習の学び

臨床看護経験をもつ助産師学生は、自身の経験を活用できるような指導や助言を受けられた時に学びを深められたと感じていた。それは、「他の学生は教員がついて行っていることでも、バイタルサインの測定や清拭などは自主的に教員がつかなくてもやらせてもらえた」など、基本的な看護技術に対する信頼や、「指導者が、看護もこういう考え方でしょう、と分かりにくいところを言い換えて教えてくれた」など、看護の思考プロセスに沿った助言であった。

4. 助産学実習において臨床看護経験が活用できなかった内容 (表3)

1) 異なる新しい課題への取り組みに対する困難

「産科での臨床経験がなく助産に関することは初めての経験だったので、看護の経験を活かしたと感ずることは少なかった」との語りから、助産学実習においては、今までの臨床経験を活用できなかったことでの不全感や困難を感じていた。その困難とは、新しい課題への取り組みとして、今までは傷病・疾病を抱える患者への痛みのケアや疾病からの回復プロセスという看護過程の展開が中心であったが、助産では健康な妊産婦に対しウェルネス思考で助産過程を考えることへの変換であった。また、さらに健康な妊娠経過を維持するための予期的指導として行われる「保健指導」が多いことも新しい課題であった。そのような保健指導については実際に経験したことがないため、実習場面で臨床スタッフの指導場面を1～2例見学してすぐの実施は、看護経験があっても難しい

内容である。そのため、実習前に教員による具体的な指導場面の展開についてロールモデルを示してもらい、どこで看護の実務経験が活用できるのかについて助言をもらうことができれば、スムーズに実習場面に活用できたのではないかと対象学生全員が考えていた。

実習場面における対象者への助産実践上の他の困難は、「対象者の前で自分が行き詰った際に教員に助け舟を出してほしかったと思うこともあったが、教員にそのことを伝えられずにいた」ことであった。それは教員に、「経験者なのにこんなことを聞いても大丈夫か」という遠慮や恥じらいの気持ちが拭えないことから助言を求められなかったためであった。その後悔の思いは実習が終了した後も残っていた。それは、「今思えば実習に必要な数をこなしてきただけかもしれない」と、実習に対する悔恨の思いや達成感が得られなかったと感じる要因の一つになっていた。

2) 未経験の助産技術展開への不安

看護学生時代の母性看護学実習は2～3週間程度であったが、助産学実習は前期9週間、後期12週間の長期間に及ぶ。対象者は実習期間を長く感じており、「終わりが見えない不安」と語っていた。それは、「全く新しく高い技術が要求される分娩介助」、「産褥復古や乳房状態、新生児の状態を診断しながらの母子との関わり」、「継続事例で夜間も分娩待機をし、助産の一連の過程を自分が責任を持って行うことと責任の重圧・使命感」などが要因であった。また、不安が残ったまま実習が終了したため、「自分が成長したと感ずることができない」と思い、自分は確実に学べたのかという自信のなさにつながっていた。

3) 年齢・体力のギャップ：現役学生との比較

臨床経験を積み重ねてきた分、他の学生と比較して年齢が高いことに対し、「クラスの中で長老なのが嫌」、「看護学生時代より体力や記憶力が落ちた」と語った。「現役学生のように、若いと覚えも早いし、経験がない分スムーズに吸収できてうら

表3 助産学実習において臨床看護経験が活用できなかった内容

カテゴリー	サブカテゴリー	データ：対象者の言葉
1) 異なる新しい課題への取り組みに対する困難	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの看護経験の応用ができない (産科臨床の特殊性) ・シュミレーションやロールモデルを多く必要とする ・環境適応の困難 	<ul style="list-style-type: none"> ・産科での勤務経験がなかったので、助産に関することは初めての経験となり経験が生かせたと感じることは少なかった (A-28) ・看護の知識や技術を問われ、応用を他の学生より多く求められるが産科に特化したものはわからないことが多い (A-29) ・看護師時代にやっていた清潔・不潔が、分娩介助の際の準清潔野との混乱を招いた (C-32) ・助産師学生ではなく、看護師スタッフとしてその場にいたなら、対象者に声をかけてあげられたと思うことも、学生という身分から、どこまで言ってもいいのかわからないことや、言えないことがあって悔しい思いをした (A-35) ・どうしてもミルクを足したくないおっぱいの出ない医療従事者である母親に対して、体重減少や黄染が強くなったときに助言がうまくできなくて、結局は光線療法となり母子分離をせざる得なくなったのが切なかった (B-48) ・夜勤では勤務時間終了までの先が見えているので、夜中に起きていることができたが、実習では担当した対象者が生まれるまで自分がいないとわからないので先が見えない (A-13) ・助産過程の展開はそれほど苦痛ではなかったが、パンフレット作りやベースレビューを手作りで行うのが大変だった (C-15) ・リアルタイムで対象者にどのように返答すればよいのかわからなかったときに、教員・指導者に助け船を出してほしかった (A-42) ・輸液ポンプのアラームが鳴っているときに動きたくなくなるが、学生なのでできなかった (B-30) ・K2 シロップなど勤務していた時には行っていたことが見学しかできないときなどもどかしい (B-31)
2) 未経験の助産技術展開への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・看護学生時代と異なる長期間の実習 ・全く新しい分娩介助に関する技術の実践 ・母子という2つの命を同時に預かる責任への重圧感 ・助産診断とアセスメント (看護過程との違い) ・分娩待機「オンコール」実習の緊張感 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習が始まる時には、途方もなく長く感じていて、先が見えないから怖く感じていたけれど、終わった今はちょうどよかったかなって思う (C-48) ・何もわからないのにお産取り上げていいのか？という不安 (C-10) ・学校で習った分娩介助の方法が古いといわれた。新しい技術・知識を教えてほしかった (2名) (A-43) (C-27) ・「経験者だからあなたはできると思っていたから言わなかった」と後になって言われた (C-59) ・「機械的な分娩介助、いつまでそんなことやるの」と厳しく言われた (C-59) ・実習が終わった今も、自分が成長していると感じることができない (B-57) ・臨床実習では多くのことを学んだと思うが、それが自分のものになったのが不安 (B-58) ・対象者の喜ぶ顔が見たいのに、追いついていかない自分にやきもき (A-52) ・将来勤務予定の病院だったので、学生というより新人助産師と同じような扱いを受け、求められることが高かった (B-13) ・ウェルネス思考で考えられなくて、しばらく問題点ばかりを探していた (A-11)

		<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントが大変 (A-10) ・より健康に (ウェルネス)と言われていたが、初めは意味が分からなかった ・継続事例がいつ生まれるのか気になって、正期産に入ってからはずっとソワソワして落ち着かなかったし、日常生活の行動の制限がなかった (B-14)
3) 年齢・体力のギャップ (現役学生との比較)	<ul style="list-style-type: none"> ・記憶力・体力の低下を他の現役学生と比較して感じる精神的な焦りや不安 ・学生としてまとめるべき記録物の量が膨大 ・睡眠不足 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの中で長老なのが嫌 (A-53) ・体力・記憶力の低下 (3名) (A-54) (B-59) (C-61) ・看護学校の時より作業効率や体力、記憶力などが落ちた (2名) (A-50) (B-59) ・記録が多くて寝る時間が少ないので疲れが日々たまる (3名) (A-9) (B-12) (C-14) ・オンコールで寝れないことがあった (A-12) ・現役生のほうが覚えも早いし、経験がない分指導がスムーズに吸収できていいなあと思っていた (C-50) ・対象者の前で「この学生行動が遅くてすみませんね」と嫌味を言われた (C-18) ・指導を受ける前に「臨床でやってきてたんだよね?」と、いちいち言われた (A-30) ・他の学生と比べられて、求められるところが高い (B-32) ・指導者より自分の方が年上だったので敬語を使われた (C-58)
4) 専門職大学院における助産学実習カリキュラムの課題	<ul style="list-style-type: none"> ・母性学看護学実習における経験の少なさ ・実習前の自己課題が追いつかない ・事例数と実践経験は豊富にできるのにリフレクションが追いつかない 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎実習に行く時期が早すぎて、何をしたらいいのかわからなかった (3名) (A-5) (B-6) (C-9) ・看護学校の母性実習から時間がたっているから忘れていることが多い (B-5) ・妊婦健診でもっと対象の方に実際に使える知識などを実習前の講義などで教えてほしかった (A-44) ・退院指導や沐浴指導など指導系は経験がなく、イメージがわからないので実習前にデモしてほしかった (B-41) ・新生児の体重管理の考え方がいろいろあったので方法を実習前に教えてほしかった (C-62) ・スタッフに指導されたことを教員に報告して「それはちがう」と言われ、どちらがいいのが混乱した教員からもスタッフに確認してほしかった (C-44) ・教員の話が進んでしまい、結局自分の求めていることにたどり着けないことがあった (A-40) ・指導者に「こんなこともわからないで実習に来てるの」と言われた (C-20) ・真面目に報告しているのに「ふざけないで」と言われ、何度もやり直しさせられた (C-17) ・自分のしたい実践と臨床助産師の実践のズレ (C-60) ・ウェルネス思考で考えられなくて、しばらく問題点ばかりを探していた (B-36) ・アセスメントが大変 (A-10) ・気が付けば、分娩介助の件数が 10 件以上となっているが、今思うとただ数をこなしていた感じが残ってしまう (B-56) ・自分の中で「働いていたのにこんなこと聞いたらダメかな」という遠慮する気分があった (C-51)

やましい」と、現役学生と比較して体力や記憶力の低下について対象学生全員が感じていた。また、臨床での実務記録とは異なり、膨大な実習記録に費やす時間や、夜間も分娩やオンコール実習などによって睡眠時間が少なくなったことで、さらに体力の低下を感じたと語った。

5. 助産学実習カリキュラムの課題

T大学大学院におけるカリキュラムでは、入学後、学内で講義と演習を行うが、その2か月後には助産学実習が開始し、分娩介助も始まる。この実習開始時期について、「基礎実習に行く時期が早すぎて準備が十分出来なかったので実習先で戸惑うことが多かった」と対象者全員が答えた。T大学大学院カリキュラムの実習時間は非常に多く、国際助産師連盟(ICM)で採択された「助産師教育の世界基準」を満たし、実践能力を重視したカリキュラムとなっている。しかし、助産学実習のレディネスとしての母性看護学実習における学びでは、少子化による分娩数の減少に伴い、分娩の見学をした経験がない、新生児のケアを経験したことがないなど非常に少ない経験のまま助産課程へ進学する現状がある。

V. 考察

看護師としての臨床経験を持つ助産師学生は、今までの経験で培った知識や技術を活用しながら、新しい助産学の知識や経験を豊かなものにしたいたいと日々学習や実習に励んでいた。しかし、実習場面では経験が活用できないジレンマを抱え、現役学生との比較から精神的な焦りを持つことが学習の困難要因となっていた。助産師は看護師免許取得後の資格であり、看護の学びを基礎として重視している。そのため、臨床看護経験のある学生は今までの経験を十分に助産学に活用できることが望ましく、臨床実習では現役学生とは異なる教育的配慮が必要ではないかと考える。

1. 臨床看護経験をもつ助産師学生の抱える学習困難

臨床経験を持つ助産師学生は、助産師になることへの明確な志望動機を持って入学してくるため、学習に対するモチベーションは高い。しかし、その一方で、それまでの看護師としての社会人生活から一変した新しい環境で、再び学生生活に戻り、新たな学習をする状況のなか、現役学生とは異なる困難感やストレスを感じていることが確認された。

1) 臨床看護経験の応用に対する困難

臨床経験のある助産師学生は、すでに看護師として勤務していたため、現役学生よりも臨床現場への適応能力は高いが、過去の仕事の経験から条件反射的にスタッフのように動きたくることと、一方で学生らしく行動したいと思うこととの間で葛藤が生じていた。本調査結果より、臨床経験があるため臨床現場の空気を読みスムーズな行動がとれるなど、経験があることでのポジティブな面は実習において強みとなっていたが、逆に臨床経験があるゆえに経験を活かさないジレンマや、学生として学ぶ気持ちに対する葛藤が実習上の学習困難となることがわかった。

この学習困難を引き起こすジレンマや混乱は、看護における知識や技術を今までは実践できていたにもかかわらず、助産学実習という新しい未経験の実践を行う中で、困難に思わずにスムーズにできていたことさえ混乱を起こすことがあると考える。

助産学実習では、教員は看護の経験を応用する思考プロセスを求めるが、対象学生の「看護の応用を求められたが、産科に独特の内容はわからないことが多く、経験が活かせなかった」という語りから、経験を持つ学生にとっては新しい体験として認識され、教員・学生の両者間で認識のズレが生じていたと考える。その認識のズレは教員との関係性に影響したと考える。臨床経験を活かしたいと思う教員と、それができないと思う学生の間

のその思いの差が、相互に関わりにくさとなり、さらに臨床経験者の学習困難に影響していたと考える。

これまで、臨床経験のある学生は、看護の基本は理解できており、看護過程も展開できてきた。臨床現場で日々対象者とコミュニケーションを取り、看護技術も向上させていた。しかし、助産学実習の場面では、今まで臨床現場で行っていたことも、自分の立場と対象者の違いにより混乱が生じ、焦燥感や戸惑い、不安となり、今までの経験がリセットされた状態になってしまう感覚があったと考える。

2) 経験と学習の統合

臨床経験者は、助産学実習の後期の実習において、前期の実習では不確実だったことを学び直すことができ、後期の実習の場がこれまでの自身の経験についてのリフレクションの場となっていた。

しかし、前期の実習においては、助産学実習は今までの経験と大変異なる経験としてとらえる感覚が、以前の経験と今の経験の結びつけることを困難にしていたと考える。経験と学習について、John Dewey⁶⁾は「経験は相互にあまりにも切り離されたかたちでなされるので、個々の経験はそれ自体で快適なものであったり、興奮をさそうものであったりしても、それらの経験は相互に累積的には結びついていないかもしれない。」、さらに「そのような場合には、人の活力は拡散され、人は散漫になる」と述べている。

また、臨床経験者では、現役学生とは異なる混乱を抱えることを確認した。その混乱による焦りや戸惑い、不安などが生じ、これがストレスとなつてさらに学習困難を引き起こしていたと考える。

経験から学習する能力について、松尾⁷⁾は、「自分の能力に対する自信」、「学習機会を追い求める姿勢」、「挑戦する姿勢」、「柔軟性」であると述べている。すなわち自分の能力に対して自信を持ち、学習機会を追い求め、リスクをかえりみず挑戦し、

状況に応じて柔軟に自分の行動や考え方を変えることができる人ほど、経験から学習することができると思う。安酸⁸⁾は、看護学実習における経験型実習教育を提唱しており、「複雑な現象のなかでの経験を、学習者が自ら意味づけしていくという学習形態をとる実習を経験型と呼ぶ。学生の成長過程を考えると、様々な経験をどのように意味づけしていくかが、その学生の成長に大きく関わっている」と述べている。そして、「経験型実習教育では、学生は講義・演習で学んだ看護学の知識や技能をいったん忘れて、患者やその家族、医療従事者とのかかわり、臨床の中につかる」という直接的経験をすることを推奨している。今回の研究対象の学生全員が、「実習の記録が多くて、休息や睡眠がとれなかった」と語っていた。実習の中では、助産の知識・技術を統合させるように組み立て、アセスメントの根拠まで詳細な記述をするように求められるが、そのため学生に課される記録の量は膨大になってくる。学生は実習場面ではその記録を作成するため、対象からの聞き取り内容やカルテの情報を書き写すことに必死になるような現象が起こっている。学生は必要と思われるすべての情報を書き出し、そこからアセスメントを考えて助産過程を展開するが、臨床経験のある学生では、そのプロセスは思考上ですでに整理されているため、改めて書き出すことに混乱と困難を感じていた。そこに今までの経験を活用したい思いが働くが、それがスタッフのようにはできないことによる焦燥感を引き起こしていたと考える。

また、これまで看護記録は臨床現場で行っており、自分の記録物として書き写すことは看護学生時代の実習以来していない。さらに、助産師学生になって初めて学ぶ知識や技術、特に分娩介助実習は臨床経験があっても常に母児の命を預かる緊張感あるものであった。その際、看護経験を尊重されつつ具体的な助言を受けることができた時、学生は適切な指導を受けられたと感じていた。これは経験を認められることにより、自尊心が高め

られ、助産師学生としての自己効力感が増していたことを示す。そこには教員や臨床指導者の助言のあり方が大きく影響するため、安酸⁸⁾が示唆する直接的・経験型の実践を中心に助産学実習を進めることが教育的配慮として必要と考える。

3) 問題志向型からウェルネス志向型への転換における困難

看護場面では疾病や障害により抱える日常生活上の問題を解決する問題志向型を基本とした看護過程の展開を行うことが多いが、助産では健康上は問題がない妊産婦に対するウェルネス志向型による助産過程の展開を学ぶ。妊娠・出産は病気ではないため、生理的変化が順調に経過すること、異常への逸脱を予防するためのケアとなる。しかし、最初は看護上の「問題」を探す学生が多く、特に臨床看護経験者は今までの傷病者ケアに対する問題志向のプロセスの経験があるため、現役学生と比較すると思いの切り替えに時間を要していた。渡邊⁹⁾は、「成人学習者は、新しいことを学ぶ過程において、過去の経験によって知り得た知識や判断基準を参考に状況判断していく」と述べており、臨床経験を持つ助産師学生は、現役学生と比較して思考の変換に対する混乱が大きいことが推察される。

また、経験が適応にマイナスの影響をもたらす要因について、照井ら¹⁰⁾は、「成人の長い人生経験を通過するうちに、一人一人が固定的な前提や価値観を身につけるようになる。これらの前提や価値観の中には急激な社会的背景変化に適応する際に障害になるものがある」と述べている。臨床経験者では、今までの経験が新しい知識や思考の変換の受容を困難にしていることも考慮する必要がある。

2. 現役学生との相違

1) 年齢の相違

対象学生は26～28歳で、現役学生との年齢差は4～6年程度である。実際には、学業や体力面にお

いて現役学生との間に大きな差はみられていなかったにも関わらず、対象学生たちは、現役の学生たちとのギャップを体力や学習において感じていた。それは、年齢による体力や学習能力の低下ではなく、現役学生との比較による精神的な焦りや不安が要因と推測される。

臨床実習先では現役学生と一緒に学ぶことになるが、臨床経験をもつ学生は社会人経験者であり、教員や現役学生から積極性などが身につけていると思われるためリーダー的役割を担うことも多かった。しかし、渡邊ら¹¹⁾が述べるように、年長で経験者の皆がリーダーシップを発揮できるわけではなく、それに伴うプレッシャーを感じることもある。実際に、今回語っていた言葉の中に、「経験者だからしっかりしないと、という気持ちの緊張があった」など、現役学生との共同作業では想像以上に負荷がかかり、それがストレスとなっていた。

小野田¹²⁾によると、社会人経験者は入学動機や将来への目標などしっかりした内発的動機付けの高さが影響しており、リーダーシップや積極性は社会経験で身につけていることも考えられるが、その人の性格や培われてきた過去の経験、生活歴も影響するため、一般化できないと述べている。このため、教員には、経験ある年長学生についての性格や社会性も考慮した上で、その学生の考えを十分に聞き、現役学生と同等に扱った方が良いのかどうかなど、その状況に応じて柔軟に対応することが望まれる。

2) 学習過程と学習方略におけるギャップ

全ての対象学生が感じていた内容として、「現役学生の方が覚えも早いし、経験がない分指導がスムーズに吸収しているような気がした」、「体力や記憶力の低下を感じた」と、自分たちと現役学生との違いを語った。

Knowles¹³⁾は成人教育の現代学実践の中で、学習と教授に関する論点を述べており、その中で成人学習について、「20歳以降の人間の学習能力は非常にゆっくりと、また少しずつ低下する」とい

う研究結果を報告し、実際には25歳以上では学習能力が1年に約1%ずつ低下していくということが示されていた。しかし、その後の研究で、低下するのは学習のスピードであって知的能力ではないということ、さらにこの低下は知性の継続的な使用によって低減されるであろうということも併せて報告している。また、國見¹⁴⁾によると、短期・長期の加齢変化に関する研究においては短期記憶よりも長期記憶において衰退がみられると報告している。

現役学生では過去の臨床モデルを持っていないため、新しい学びがストレスや抵抗なく新しいものとして単純に学び取り、そこで練習を重ねて行くことで新しい学びを形成する。それに対して、経験のある学生では、助産学の新しい知識や情報は、すでに臨床で学んでいたこととどこが一致するのかという探索行動が情報を統合する際におきることが推測される。

臨床看護経験者におこる混乱は、年齢的な問題ではなく、経験そのものが学習においてフィルターとなって情報の整理に時間がかかることによる焦燥感から、それが記憶力の低下と感じられ学習への不安を招いていると考える。

3. 臨床看護経験者の助産学実習における教育的配慮のあり方

T大学大学院は専門職大学院のカリキュラム特徴として、「2年課程にしかできない、助産を深く丁寧に学ぶということ」、「助産所実習を含む合計29週間の実習期間、53例を超える事例数」、「助産師教育の世界基準を満たした、実践能力の育成を重視した2年の教育課程」、「先輩や院生にいつでも相談できる教育環境」、「女性の生涯を通じた性と生殖の健康支援」がある。そのため、実習時間は非常に多く国際助産師連盟(ICM)で採択された「助産師教育の世界基準」を満たし、実践能力を重視したカリキュラムとなっている。しかし、少子化による分娩数の減少に伴い、母性看護学実習

での実習経験は非常に少なくなっており、分娩の見学をした経験がない、新生児のケアを経験したことがない学生が助産課程へ進学してくる。その背景から、入学後2カ月半の期間で看護学実習の不足を十分補える時間が確保されているとは言い難い。また、臨床経験者が助産学実習に出るまでの間に、これまでの経験と学習をどのように統合させるかについて十分検討する準備時間が不足していると考えられる。

1) 実習場面の中での振り返り

2010年の厚生労働省の報告²⁾では、看護教育において、「社会人を経験した学生が増えてきたことで学習状況や生活体験など、様々な面で学生間の差が広がってきており、一斉に教授する際の学生のレディネスに合わせるのが難しくなっている」ことが指摘されており、教授方法の在り方が問われている。実習においては、「実践能力の育成のために、実践と思考の連動を図ることが重要」であり、そのためには「実習中あるいは実習後の振り返りを行うことが必要」であると報告している。

ドナルド・A・ショーン¹⁵⁾は、「行為の中の省察の多くは、驚きの経験と結びついている。直観的で無意識的な行為が、予測しうる結果しか生み出していない場合には、私たちはさらにそれについて考えようとはしない。」と述べている。さらに、「しかし直観的な行為から驚き、喜び、希望が生まれ、予期しなかったことが発生すると、私たちは行為の中の省察によってその事態に対応するだろう」と述べている。助産学実習は、出産そして新生児の誕生という予測できない驚きや喜び、感動の連続を体験する場である。その一連の助産実践行為の中で、予測しなかったことへの対応を深い省察によって対応できれば、次にその学びを活かすことができると考える。

さらに、実践の中での成功体験は、学生の自己効力感と学習意欲を高め、課題の達成も容易にする相乗効果が期待できると考える。片倉¹⁶⁾は、「助産技術の正確な実践に対してや効果的に助産ケア

の実施ができたときに褒め言葉やよい評価をされたことで自己効力感が高まっていた。妊産褥婦から褒められ励まされた言葉も同様であった」と述べている。周囲からのよい評価が学生の気持ちを高め、自分の存在価値を見出してくれると感じることが学習に対する自己効力感を高めることから、教員や指導者は意識的に褒める言葉や良い評価を伝えてゆくことを心掛ける必要がある。

助産学実習は看護の実習とは異なり、長期間連続して1か所の臨床現場で行われることが多く、その中で常に高いモチベーションを維持するためには努力が必要である。そのため、長い実習期間の中で小さな成功体験を重ねることが、次の課題へ挑戦していくモチベーションになると考える。

2) 臨床経験を吟味する

臨床経験を持っている学生は、指導者から「臨床経験者だから」と現役学生と比較して高いレベルを求められ、経験者であるという理由でゆえに注意を受けることも多かった。教員や指導者が学生の臨床経験に過度の期待感を持っていると、それが学生に重圧となり、「働いていたのにこんなことを聞いてもよいのか遠慮してしまう」と、ためらいの気持ちが生じる。

ベナー¹⁷⁾は、「臨床教育をする教師たちは常に実践で要求される熟練したノウハウの習得を支援すると同時に、何かまだわかっていないことはないかに注意し、自己の推測を逆方向からも考えてみるような固定観念にとらわれない態度を学生が保てるように支援しなければならない」と述べている。臨床経験のある学生に対し、共に関わり方を考える姿勢、学生の考えを聞く姿勢や、これまでの看護経験を否定しないような教育的配慮が必要ではないかと考える。

また、臨床看護経験のある学生では、自らがプリセプターや学生指導者という役割を果たしていた者もあり、自身の経験から指導する側の気持ちも理解している者もいる。その理解ができる場合には、厳しい指導場面でも助言を肯定的に受け取

り、さらに意欲的に学習に取り組むこともできたと語った。このように、学生の背景に配慮して指導の方法を考えることが必要である。

3) 経験者に対する指導や助言のあり方：助産師教育への配慮

臨床経験者は、看護の経験はあっても助産学に関しては初学者であるが、「経験者だからできると思っていただけ」、「臨床でやってきたはずだよね」などと言われることが多かったと語った。また、臨床指導者は交代勤務のため学生とは断片的に接することが多く、学生と継続的にコミュニケーションをとる機会は少ない。林¹⁸⁾は、「指導者は、対象者に実際に看護を行いながらの指導になることも多く、学生のレディネスを把握するほどの余裕がないのが実際である」と述べている。臨床指導者は学生の看護経験を活用するための配慮をするが、経験によってできるだろうという思いから考える現役学生よりも高い目標を求めてしまうと考え。学生の背景や看護師としての経験内容、そして母性関連領域の学習レディネスを、教員は十分把握した上で臨床との調整を行いフォローすることが必要と考える。

厚生労働省のワーキンググループ²⁾が、教育方法について、「教育の質を高めるためには、教員が自己の教育方法を常に見直す必要がある」と述べているが、教員は学生の「戸惑いや困惑を手掛かりに」その経験を共有し、経験場面のリフレクションを促す援助が必要と考える。

また教員は、臨床看護経験のある学生が理解に時間がかかる理由を、学生の欠点ととらえるのではなく、教員自身も省察的に教授方法を考えなければならない。それによって新しい指導方法、今までとは異なる指導的アプローチを開発する努力をする必要がある。

VI. 本研究の限界と課題

本研究は、研究者自身が同様の経験を持ち、そ

の内的な経験を対象者との共通の要素として、対象者との信頼関係を築き詳細な聞き取りを行うことができた。インタビューガイドを用いたが、率直な対象者の思いを聴くことができた。

しかし、対象者が3名と少なく、特定の教育機関に限定されており、担当教員や実習施設など実習の背景も異なっていた。対象者の語りの言葉の質的な検討と抽象化を行ったが、個別性の影響は大きかった。今後更に多くの事例を集積し、異なる教育機関における比較や、臨床経験者の実習指導における教員や臨床指導者の考えや指導上の困難なども併せて双方向的に検討を重ねることが必要と考える。

VII. 結論

看護師としての臨床経験を持つ学生では、その経験を効果的に活用できないことによる心理的葛藤と学習困難を抱えていた。同時に、助産過程の展開において、これまでの看護臨床場面での問題志向型から健康な妊産褥婦へのウェルネス志向型への助産過程への転換について思考の混乱が生じていた。さらに、これまでの臨床経験を活用できないことに対する葛藤、現役学生とのギャップから感じる学習への不安から、助産学実習の経過において自己効力感の低下を感じるなど、臨床看護経験者では助産学実習における特有の困難を抱えていた。これらの結果から、臨床経験者が助産学実習の学びを高めるためには、これまでの個人の過去の臨床経験を省察的に吟味し、その経験が実習場面で十分活用できるような教育的配慮が必要と考える。

謝辞

本研究にご理解いただき、快くご協力くださった対象学生の方々に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 鈴木由美・島田葉子：臨床経験のある助産師学生についての研究 - 学生生活の実際と臨床実習が及ぼす影響 - . 桐生大学紀要, 25, 57-67, 2014.
- 2) 厚生労働省：2010年看護師教育ワーキンググループ経過報告，資料3. 2012 (2016. 8. 6 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200000v4n9-att/2r985200000v4yi.pdf>).
- 3) 看護行政研究会：看護六法（平成28年版），81，新日本法規出版株式会社，2016.
- 4) 鈴木由美・古賀裕子：臨床経験のある助産師学生についての研究（第2報）～臨床経験が助産学実習に及ぼす影響～，日本母性衛生学会，56（3），246，2015.
- 5) Denise F. Polit・Cheryl Tatano Beck(2004)／近藤潤子監訳：看護研究 原理と方法（第2版），医学書院，2010.
- 6) John Dewey (1938)／市村尚久訳：経験と教育，31，講談社，2004.
- 7) 松尾陸：経験からの学習 - プロフェッショナルへの成長プロセス - ，同文館出版，2006.
- 8) 安酸史子：新しい実習教育への模索，Quality Nursing, 5（8），4-18，1999.
- 9) 渡邊洋子：生涯学習時代の成人教育学 - 学習者支援へのアドヴォカシー - ，64-66，明石書店，2004.
- 10) 照井保則・島山晃：成人の学習課題と学習プログラムの開発に関する研究，いわての生涯学習，9-13，2001.
- 11) 渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝：看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感，日本看護学会論文集，43，106-109，2013.
- 12) 小野田真弓：社会人経験を持つ学生の臨地実習における体験，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28，87-93，2003.

- 13) Knowles, Malcolm.S (1980)／堀薫夫・三輪建二監訳：成人教育の現代的実践 - ペタゴジーからアンドラゴジーへ - (第3版), 59, 鳳書房, 2012.
- 14) 國見充展：ワーキングメモリ課題と短期記憶課題遂行能力の加齢変化, 人間社会環境研究, 13, 203-210, 2007.
- 15) ドナルド・A・ショーン (1983)／柳沢昌一・三輪建二監訳 (2007)：省察的実践とはなにかープロフェッショナルの行為と思考ー, 50, 鳳書房, 2007.
- 16) 片倉裕子：助産師学生が臨地実習で自己効力感を高める要因の分析, 北海道文教大学研究紀要, 37, 73-83, 2012.
- 17) P. Benner, M. Sutphen, V. Leonard, & L. Day (2010)／早野 ZITO 真佐子：ベナー ナースを育てる, 209, 医学書院, 2011.
- 18) 林聡美：母性看護学実習における社会人健康がある学生への臨地実習指導者の関わり, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究研究集録, 38, 167-174. 2013.

(インタビューガイド)

資料 1

<看護の臨床経験のある助産師学生に対する質問>

年齢:

看護師としての経験年数:

勤務していた科:

勤務体制:外来勤務、病棟勤務、()交代制

勤務していた時の職位:師長、主任、スタッフ、臨床指導者、プリセプター、他()

助産師を目指した時期:

助産師になろうと思ったきっかけ:

大学院を受験したきっかけ:



1. 大学院での助産学実習についてうかがいます。

1. 実習期間はどうか？(基礎 6 週間、統合 12 週間)

()

2. 実習期間中楽しかったことは何ですか？

()

3. 実習期間中つらかったことは何ですか？

()

4. 実習中、ストレスを感じましたか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方は、その対処方法は？

()

5. 教員や臨床指導者との関係は円滑に行われましたか？

・はい

・いいえ

それはどのような場面を感じましたか？

()

6. 実習メンバーとの関係は良かったですか？

・はい

・いいえ

それはどのような場面を感じましたか？

()

II.自分の看護経験が助産学実習に影響を及ぼしたことについてうかがいます。

1. 看護師としての臨床経験が活かされたと感じることはどんなことでしたか。

()

2. 看護師としての臨床経験が活かされなかったと感じることはどんなことでしたか。

()

3. 教員や臨床指導者は看護師の臨床経験があると知っていましたか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方についてうかがいます。

看護経験を考慮した指導を受けましたか？(他の学生と比較されたことはありますか？)

・はい

・いいえ

※はいと答えた方は、どんなことがありましたか？

()

4. 看護の臨床経験が実習の場面で思考の妨げになったり、悩んだりしたことはありますか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方は、どんなことでしたか？

()

III.助産学実習における教員の教育支援についてうかがいます。

1. 実習中教員からの指導や助言を受けましたか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方にうかがいます。

その指導や助言は実習を行っていくうえで役に立ちましたか？それはどんなことでしたか？

()



2. 教員や臨床指導者は他の学生(現役入学生)と指導上での違いを考慮してくれていましたか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方は、どんなことでしたか？

()

それは、自分にとって有効であったと感じますか？

・はい

・いいえ

※はいと答えた方は、どんなことでしたか？

()

3. 実習でもっとこんなことを指導してほしかったことなどありますか？

()

IV. 実習前にどんな教育や指導を受けておきたかったですか？

()

V. 次回の実習までに頑張っておきたいことはありますか？

()

VI. 助産学実習(基礎・統合)を終えて感じたことを自由に記入してください。

()

VII. 自分自身は看護の臨床経験を積んでからの助産への進学でよかったと感じますか？

・経験があつてからの入学でよかった

・現役で入学したかった

※その理由を教えてください。

()



ご協力ありがとうございました。